

遊びが育てる、

生きる力。



県政運営の基本指針「新・宮城の将来ビジョン」に基づき、各分野で魅力的な活動を展開する県内の企業や団体などを紹介するコーナーです。今回のテーマは「子ども・子育て」。子どもが遊び育つ社会を目指す一般社団法人プレーワーカーズの代表、須永力さんにお話を伺いました。



プレーパークとは

子どもが「やってみよう」と思うことに自由に挑戦できる遊び場のことです。1943年にデンマークで「廃材遊び場」として始まり、「整った遊具よりも、身近な素材や空き地の方が子どもは生き生きと遊ぶ」という発見をきっかけに広がりました。日本では1975年、東京都世田谷区で住民の手によって初めて実施され、その後全国へと広がりました。



制限する言葉が重なることで、子どもたちの生きる場が少しずつ狭められているといえます。
見守る距離感

「大人が遊びを支える上で大切なのは、監視ではなく見守りです。困った時に手を差し伸べられる距離を保ちつつ、普段は明らかに見守る。それが安心して挑戦できる環境につながります」と須永さんは話します。また、大人には危険を見極める役割があるといえます。思わぬ事故につながる「ハザード」は取り除き、自ら挑戦する中で生じ

る「リスク」はあえて残す。このバランスの中で、子どもは体験を重ね、危険を察知しながら判断する力を育てていくといえます。

遊びが日常を取り戻す

須永さんは、阪神・淡路大震災、東日本大震災、能登半島地震などの被災地でも遊び場を開いてきました。震災後、思いきり体を動かす機会を失っていた子どもたちが、遊びをきっかけに再び走り回るようになる姿もありました。また、震災の不安から外で母親の手を離せなかつ

た幼い子どもが、初めてその手を離し、夢中で遊び出す場面もあったといえます。「遊びには、心を癒やし、元気を取り戻す力があります。それは災害時だけでなく、日常でも同じです」。

「遊び場」がいない社会へ

これまで、県の支援などを受けて「プレーワーカー養成講座」を開催し、担い手の育成にも力を注いできました。プレーワーカーは、子どもの「遊ぶ力」を妨げない環境を整える存在です。子どもと大人の間に立ち、「遊びは自由でいい」という考え方を支える調整役でもあります。子どもの遊びの価値への理解が広まるにつれ、県内でもプレーパークや担い手は着実に増えていきます。しかし、須永さんが描く究極のゴールは、「プレーパークが不要になる社会」です。特別な場所がなくても、子どもがまちのどこでも自由に安心して遊ぶことができ、地域がそれを自然に見守る、そんな日常です。――遊びが育てる、生きる力。その力が息づくまちは、きっと誰もが生きやすい地域の姿です。



木にロープを掛けたブランコや泥んこ遊びなど、身近な自然の中で思い思いに遊ぶ子どもたち。プレーパークでは、やってみよう気持ちを大切に、自由な遊びが広がります。

遊びの側に立つと決めた日

子どもたちが走り回り、笑い声が響く遊び場。泥だらけの手、夢中で何かを作る姿。大人がつい「危ない」と口を出したくなる場面でも、子どもが自分で考え、挑戦し、失敗しながら育っていく時間が流れています。

この「遊び場づくり」に取り組んでいるのが、名取市を拠点に活動する須永さんです。活動のきっかけは、教員を目指していた頃に携わった東京都世田谷区のプレーパークでの出来事でした。よく遊びに来ていた小学生が中学受験を機に見せな

くなり、久しぶりに戻ってきた彼らの話題は、次の高校受験のことでした。勉強も大切である一方、思う存分に遊べる子ども時代が少なくなっていく現実には、強い危機感を抱いたといえます。



一般社団法人プレーワーカーズ 代表理事 須永力さん (通称：ぶんちゃ)

35年以上、常に子どもの側に立ち、遊び場づくりに携わるプレーワーカー。東日本大震災を機に、これまでの経験を生かし、東北で活動を本格化。現在は、名取市を拠点に遊び場を運営するほか、加瀬沼公園などでプレーパークを実施し、地域に根差した活動を続けています。

「教員ではなく、遊びの側に立つて子どもを支えたい」。その決意が、現在の活動へとつながっています。

遊びは子どもの土台

「遊びは、食事や睡眠と同じく、生きて育つための土台。勉強や習い事はその上に成り立つものです」と須永さんは語ります。土台が揺らげば、心や体の成長も安定しません。子どもは遊びの中で、人との関わり方や思い通りにいかない場面への向き合い方を学びます。教えられないのではなく、体験を通して身に付けていくのです。

一方で、大人に「危ない」「うるさい」と注意される場面も少なくありません。「遊んでいる声がるさい」は、「生きていく声がるさい」と言っているのと同じ」と須永さん。遊びを



名取市にある地域の子どもが安心して過ごせる遊び場「子どもの居場所」。ほぼ毎日子どもたちが訪れ、庭には手作りの木製遊具や秘密基地が並びます。週末や長期休みには子ども食堂も開催。



遊び道具を積み込み各地へ出発。移動式の遊び場は延べ 2500 回以上実施。



ホームページ



Instagram